
死者からの敬礼

一寸木 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者からの敬礼

【Nコード】

N8986A

【作者名】

一寸木 一二三

【あらすじ】

「お盆に人は帰ってくる。」その言葉は父との約束が果たされることも意味していた。祖母の言葉を信じて少年は待っていた…。

序

私が四つするとき、父は死んだ。正確に発音することすらできない名の土地で、敵の兵の銃弾を浴びて死んだのだという。骨は無く、帰ってきたのはガラスの割れた分厚い眼鏡と、一枚の戦死を告げる紙。同じように丙種合格だったお隣のおじさんは帰ってきたというのに死んだ父の顔を私は知らない。私が生まれたとき、すでに父は赤紙を受けて兵隊にとられていた。写真映りのよくない人だったようで、残されたものは父とはほとんど別人のようだと、皆が口をそろえて言う。

私がそれ以外に知っていることといえば、眼鏡を掛けていて、私と同じ色の白い細面だということ、絵を描くのがとても上手だったということだけである。すべては、母や祖母、近所の大人たちのうわさで知ったことだから本当かどうかは知らない。

絵といえば、約束のことがある。

出征前に、膨れた母の腹をなでて、父は腹の中の私に約束をしたそうだった。

「帰ってきたら、いつしよに絵を描こう。」

不器用にひよろ長い体を折り曲げて、子供の頭をなでるようにそういったのだと言う。

結局その約束は果たされることは無かった。父は死に、幼かった私はその事実を言葉だけで受け止めていた。私が父の死を心から納得できたのは、もっと後のことだ。

あれは五つの年の、お盆だったろうか。赤とんぼが空虚に美しい青空を飛んでいた。影絵のようにくつきりと、地上のものを浮かび上げらせる空を、父は同じように美しいと思ってくれたらうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986a/>

死者からの敬礼

2010年10月15日23時00分発行